RKK for the BEST!

30周年 RKK

グリーン クリーン くまもと

この町をきれいにするのはまず私。

RKKでは
熊本日日新聞社と協力して、
『グリーン・クリーン・くまもと』
キャンペーンを
展開いたしております。
「誰が拾うのか
誰が美しくするのか」
をいう前に
まず「自分が捨てない」という
行動を大切にしたいのです。
どうか
皆様ひとりひとりの胸に
このテーマが
広がりますよう
私たちは
呼びかけ続けて行きます。

RKK 熊本放送
熊本市山崎町30 ☎53—5151(代)

ベートーヴェン

第九

昭和58年12月11日(日)午後6時30分
熊本県立劇場コンサートホール
主催：熊本県・県民第九の会・熊本県文化協会

ごあいさつ

熊本県知事
細　川　護　熙

熊本県立劇場がオープンして、早くも1年たちました。県民の皆様の大きな期待が集まる中で、おかげをもって内外のかたがたから高い評価を頂いていることを、心から喜んでいます。

特に喜ばしいことは、劇場落成記念事業として行われたベートーヴェン第九の演奏の際、県の音楽界をあげて結成された『県民第九の会』によって今年もまた昨年に引き続いて第九の演奏会が開かれることです。これはまさに、地域文化創造の場となり、芸術活動の拠点となるべく、熊本県立劇場がめざしている姿そのものであり、極めて大きな意義を持つものと思います。

今後も、各方面のお力添えを得ながら着実な歩みを続け、熊本県立劇場が真に県民の皆様の文化財産となり、豊かな精神生活の実現への役割を果たす施設となることを念じながら、〝歓びの大合唱〟をご一緒に聴かせて頂きます。

熊本県文化協会会長
岩　下　雄　二

昨年、熊本県立劇場落成記念公演として、ベートーヴェンの第九を演奏し大成功を収められました「県民第九の会」の皆様が、今年も引き続きここに第九の演奏会を開かれますことを、心からお祝い申し上げます。

熊響の演奏会で県民にもすっかりお馴染になられた新進気鋭の大友直人氏を指揮者に、ソリストには今年8月のオーディションに全国各地から馳せ参じてこられた方の中から見事合格された4人を迎え、合唱団、オーケストラ合せて 300人を超えるという、まさに県民による「第九」演奏会は将来もこのコンサートホールの呼びものとして続けられることを確信致します。このコンサートホールはオープンして1年、この間にここで演奏された、国内の演奏家・演奏団体はもとより、国外の世界的な演奏団体の方々が口を揃えて素晴しいホールだと絶賛されています。また聴衆の側からも、良い音響と雰囲気の中で演奏が聴けるということで大変喜ばれていることは、県民としても一つの大きな誇りであります。今日の「県民第九」のように、県内の創造団体や、国内外の優秀な演奏家や、演奏団体によって常に利用されるようになって、はじめて、このコンサートホールの存在価値も高まり、県の文化向上につながるものと信じます。

終りに、今日の演奏会のご成功を祈念しまして、お祝いの言葉と致します。

県民第九の会実行委員長
有　馬　俊　一

歳末ご多忙な折、よくおい出下さいました。昨年に引続き今年も第九演奏会を開催することが出来て喜んでおります。

今回は指揮者に新進気鋭の大友直人氏を迎え、独唱者も全国の応募者の中から、オーディションによって若い声楽家達を起用致しましたので、昨年とは趣のちがう、若々しい第九を味わっていただけるかと思います。合唱は県合唱連盟の諸合唱団、オーケストラは熊本交響楽団です。各団体それぞれに独自の年間スケジュールを持っていますので、合同練習の時間をとるのに苦労致しました。特に熊響には、中国演奏旅行を目前にして、多大の犠牲を払っていただき感謝致しております。

ベートーヴェンが、全人類に贈る「歓びの歌」として作曲したこの曲を、私達は熊本の音楽ファンへの最高の贈り物にしたいと、休日をつぶして頑張って来ました。しかし、何分にも専門の音楽家の集まりではありませんから、必ずしもご満足いただける演奏にはならないかと心配しておりますが、みんなの努力と熱情とによって、素人でなければ出来ない、感動的な第九にしたいと念願致しております。

第四楽章の有名なメロディは、聴衆の皆様方もご存じのことと思います。何卒心の中でお歌いになりながらお聴き下さい。歓びのしらべをこのホール一杯に響かせましょう。

大友直人

NAOTO ŌTOMO

1958年東京に生まれる。４歳よりピアノを始める。桐朋学園高校音楽科を経て、同大学音楽学部を1981年に卒業。小沢征爾、秋山和慶岡部守弘、尾高忠明の各氏に師事。1978年よりNHK交響楽団を指揮してのレコーディング等で活躍。1979年よりNHK交響楽団指揮研究生となり、1981年より研究員となる。1981年NHKホールに於ける「若い芽のコンサート」でラヴェル作曲「ダフニスとクロエ」組曲第２番を指揮してデビューする。同年アメリカのタングルウッドにあるバークシャーミュージックセンターに参加。L・バーンスタイン、A・プレヴィン、I・マルケヴィッチ、各氏の指導を受ける。これまでにNHK交響楽団をはじめ、 主要オーケストラとの共演を重ねており、今後の活動が期待されている。

高見久美子 （ソプラノ）

SOPRANO

1976年　武蔵野音楽大学卒業後「ウィーン国立音楽大学」へ留学。
1980年　同大学を「全員一致の最優賞」で卒業。
1981年　６月帰国。９月「波の会日本歌曲コンクール」入賞。
　　1979年、1981年「リサイタル」（東京、熊本）
1982年　「日独協会演奏会」「ジョイント・リサイタル」（熊本、下関）
　　第37回「熊大定期演奏会」その他各地でコンサート出演。
1983年　ミュージカル「アルト・ハイデルベルグ」に「ケティー」役で出演。

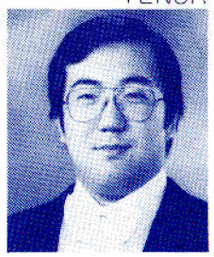
岡ますみ （アルト）

ALTO

学歴　S．50年３月　県立第二高等学校卒業。
　　55年３月　東京芸術大学音楽学部卒業。
　　57年３月　東京室内歌劇場附属。
　　現代オペラ歌手の為のワークショップ・プローベ修了。
　現在　二期会オペラスタジオオ29期研究生。
　S．56年度文化庁芸術課国内研修生。
芸歴　S．55年４月　同声会新人演奏会。５月　神奈川県新人演奏会。
　　12月　プローベ・ヴォーカルコンサート。
　　56年６月　無窮会ヴォーカルコンサート（客演）。８月〝桐の会サマーコンサート。〟10月　室内歌劇場企画おとぎオペレッタ「白雪姫」
　　57年８月〝桐の会サマーコンサート。〟８月〝アンサンブル音夢〟第一回コンサート。９月〝パウゼ〟オ一回コンサート。
　　58年８月〝アンサンブル音夢〟オ二回コンサート。９月　ＩＭＡＳオペラ「アメリア無踏会へ行く」出演。

大野光彦 （テノール）

TENOR



愛媛県新居浜市出身。
小学生の頃より新居浜少年少女合唱団において合唱活動を始める。国立音楽大学付属音楽高等学校を経て、昭和54年国立音楽大学声楽科卒業。大学在学中、混声合唱団「くにたちカンマー・コール」で活躍。現在二期会合唱団団員。合唱団員としては二期会のオペラ公演はもとより、コンサート・録音・テレビ・ラジオ出演等年間100回を越えるステージをこなしている。最近では二期会合唱団のテノールのソロを歌うことも多くなり、今年の４月、姫路にてジョイントコンサートに出演した。
西内静、長井則文、川村敬一の各氏に師事。

柴田啓介 （バリトン）

BARITONE

大分県佐伯市出身。師　中山悌一。
大分大学、大分県立芸術短大を経て、1973年に二期会合唱団に入団。（この年読売新人演奏会出演）1978年よりバスのパートリーダー。合唱団員としては二期会のオペラ公演はもとより二度の来日イタリアオペラ公演にも出演。その他コンサート、録音、テレビ、ラジオ出演等すでに1000回を越えている。
1981年　母校の記念コンサートに招かれ出演。二期会のオペラ公演でのソロやコンサート、録音等のソリストとしても多くの経験を待つ。

プログラム
PROGRAM

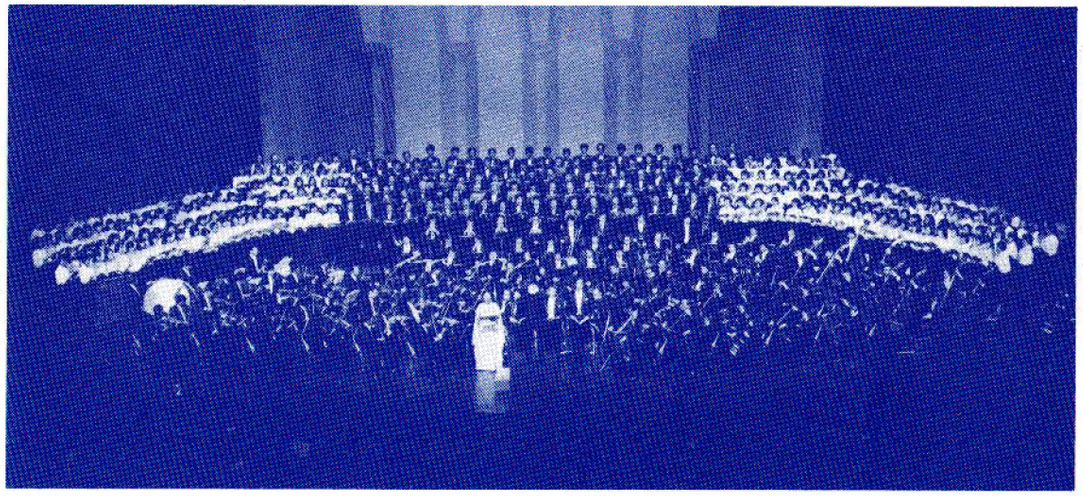
1．歌劇「ニュルンベルグのマイスタージンガー」前奏曲
ワーグナー

2．交響曲第９番 ニ短調「合唱付き」 作品125
ベートーヴェン

第１楽章 アレグロ マノン トロッポ，ウンポコマエストーソ
第２楽章 モルト ヴィヴァーチェ
第３楽章 アダージォ モルト エ カンタービレ
第４楽章 プレスト 終曲

出 演

指 揮	大友直人
独唱 ソプラノ	高見久美子
独唱 アルト	岡ますみ
独唱 テノール	大野光彦
独唱 バリトン	柴田啓介
合唱指揮	林原隆治
合唱	熊本県合唱連盟合唱団
管弦楽	熊本交響楽団



歌詞対訳

■シラー＝《歓喜に寄す》
対訳＝大宮真琴

O Freunde, nicht diese Töne! Sondern
lasst uns angenehmere anstimmen, und
freudenvollere.

Freude, schöner Götterfunken,
Tochter aus Elysium.
Wir betreten feuer—trunken,
Himmlische, dein Heiligtum!
Deine Zauber binden wieder,
Was die Mode streng geteilt;
Alle Menschen werden Brüder,
Wo dein sanfter Flugel weilt,

Wen der grosse Wurf gelungen,
Eines Freundes Freund zu sein,
Wer ein holdes Weid errungen,
Mische seinen Jubel ein!
Ja, wer aubh nur eine Seele
Sein nennt auf dem Erdenrund!
Und wer's nie gekonnt der stehle
Weinend such aus diesem Bund!

Freude trinken alle Wesen
An den Brüsten Natur;
Alle Guten, alle Bösen
Folgen ihrer Rosenspur.
Kusse gab sie uns und Reben,
Einen Freund, geprüft im Tod;
Wollust ward dem Wurm gegeben,
Und der Cherub steht vor Gott.

Froh, wie seine Sonnen fliegen
Durch des Himmels prächt'gen Plan,
Laufet, Brüder, eure Bahn,
Freudig, wie ein Held zun Siegen.

Seid umschlungen Millionen!
Diesen Kuss der ganzen Welt!
Brüder uder'm Sternenzelt
Muss ein lieber Vater wohnen.
Ihr sturzt nieder, Millionen?
Ahnest du den Schöpfer, Welt?
Such' ihn üder'm Sternenzelt!
Uber Sternen muss er wohnen.

バリトン独唱

おお、友よ、この調べではなく、
さらに快い、さらに歓びに満ちた調べを
ともに歌おう！

バリトン独唱・合唱

①歓びよ、神々のうるわしい輝きよ！
楽園の娘らよ！
われらみな、感動に酔い、
天の高みの神殿に踏み入ろう！
②この世に厳しく引き離された者らを、
神秘なる御身の力は、再び結び合わせる。
御身の優しい翼の憩うところ、
すべての者らは、同朋（はらから）となる。

四重唱・合唱

③大いなる天の賜物をうけた者らよ、
真空の友情をかち得た者らよ、
女の優しい愛を得た者らよ、
歓びの歌を、ともに歌え！
④しかり、たとえ、ただ一人の魂でさえも
地上の友と呼べる者を持つことができるならば！
だが、それさえ持つことのできなかった者は、
涙しつつ、足音をしのばせ、立ち去るがよい！

四重唱・合唱

⑤すべてこの世に在るものら、
自然の胸から歓びを飲み、
すべての善人も、すべての悪人も、
歓びの薔薇の小径を行く。
⑥歓びは、われらに、口づけと葡萄酒と、
そして死さえも奪い去ることのできぬ友とをあたえ、
虫けらにさえも楽しみがあたえられ、
天使ケルビムは、神の御前に立つ。

テノール独唱・男声合唱

⑦歓びよ、歓びよ、神の太陽たちが、
壮大な天の軌道をたのしく飛びかうように、
⑧同朋（はらから）よ、おのれの道をすすめ、
歓びに満ちて、英雄が勝利の道をすすむがごとくに。

合　　唱

⑨たがいに手をとり合おう、億万の人々よ！
この口づけを、全世界にあたえよう！
同朋（はらから）よ、星のかなたには、
愛する一人の御父が住み給うのだ。
⑩ひれ伏して祈るか？　億万の人々よ。
創り主を心に感ずるか？　世界の民よ。
星空のかなたに、主をさがし求めよう！
星たちのうえに、主は住み給うのだ！

●歌劇「ニュルンベルグのマイスタージンガー」前奏曲 ワーグナー

ワーグナーは、おおむね題材を超自然の非現実的な神話や伝説に求め、自分で劇の構想を考え、台本を作り、それに作曲した。そしてかれの楽劇においては、オーケストラ編成は従来の型を破った4管編成を要求するなど、それまでの常識を越えた壮大な表現力を確立したのである。

「ニュルンベルクのマイスタージンガー」は作曲者自身より「歌劇」と命名されてはいるものの内容的には「楽劇」にふさわしい力作である。1862年に台本が完成し、ひきつづいて、その作曲にとりかかっている。途中一時中断したが、1867年に作曲を完成した。翌68年にミュンヘンの王立宮廷国民歌劇場でハンス・フォン・ビューローの指揮により初演され、大成功をおさめた。年代的には「トリスタンとイゾルデ」と大作「ニーベルングの指環」との間にはさまれる三幕の喜劇である。他の作品と違って、ここでは実在の人物を扱っているが、かれ自身の体験による風刺や批判がこめられている。

前奏曲は歌劇全体の劇的な流れを示唆しているもので、楽譜で示すところの示導動機（ライトモティーフ）を巧みに駆使して書かれている。まず、全合奏により、明るく堂々とした「マイスタージンガーの動機」によって開始される。つづいて木管楽器によって「愛の想いの動機」が優しく表情豊かにうたわれる。弦の下降音型につづいて金管楽器とティンパニによってマイスタージンガーの「行進の動機」が勇壮にひびき、やがてそれはマイスタージンガーの「芸術の動機」へと移っていく。しだいに対位法的な厚みを増しながらクライマックスを築いたのち「仕事の動機」が木管、弦、ホルンによって対位法的に現われ、ついで青年騎士の強い愛を表わした「愛の動機」がバイオリンによって奏せられ、ひきつづき苦しいまでにせつない「情熱の動機」へとひきつがれる。しかし、青年騎士の愛の世界は、とつぜん木管によって「マイスタージンガーの動機」が縮少され、軽妙に奏される。これは真の芸術精神をはきちがえて歌の法則だけにこだわる妨害者であるよこしまなマイスタージンガーを表わしたもので、これにさきの「情熱の動機」がからんでくる。やがて低弦に明るく健全な「嘲笑の動機」が沸きおこり、音楽はしだいに立体的になっていく。そして「マイスタージンガーの動機」、「愛の動機」、「行進の動機」と3つの動機が同時になりひびき、さらに「芸術の動機」も加わり、すばらしい緊張感をもりあげていき、最後は「行進の動機」を中心として堂々とこの曲を結ぶ。

●交響曲第9番 ニ短調「合唱付き」作品125 ベートーヴェン

ベートーヴェンは、一つ一つが内容と性格を異にする八つの交響曲を書き終えたのち、生涯の最後に、九番目の交響曲に着手した。

1793年に、ボンのフィッシェニヒは、シラー夫人に手紙で「彼は歓喜をも、しかも各節残らず作曲するでしょう……」と告げていることにより、ベートーヴェンは生地ボンにいたときから、すでにシラーの詩「歓喜に寄す」に作曲したいと思っていたことがわかる。

1822年に、ロンドンのフィルハーモニー協会は、ベートーヴェンに新しい交響曲の作曲を依頼してきた。このことで、今までベートーヴェンの頭の中に、うかんだり、消えたりしていた合唱付きの交響曲の構想が、いっきょに実現することになった。そして1823年から24年にかけて、この巨大な交響曲が完成した。シラーの「歓喜に寄す」に作曲する意図をいだいて、完成するまでに、じつに30数年にわたっていることになる。

この曲は、ベートーヴェンの音楽における技法と精神の最も円熟した時代の作品であって、その内容が雄大なる精神と、大胆にして洗練され、全く独創に富んだもので、いく多の目新しい技法がそこに示され、その楽想は当時の常識を全く超えたものであった。四人の独唱者や大規模な合唱団を用いたり、終曲の初めにおいて、前の三つの楽章を回想したりなどはその一例である。

初演は1824年5月7日夜、ウイーンのケルントナートア劇場で行われた。

ベートーヴェンの聴力がかなり衰えていたことは、この曲の初演の際に、指揮者を二人おいたことでもわかる。ベートーヴェンは正指揮者のウムラウフの隣りにあって、実際の演奏とは、くい違ったテンポや表情で空しく空間に弧を描くのみであったという。

「第九」の演奏は練習不足ではあったが、聴衆には偉大な感銘を与え、各楽章の終りには万雷の如き拍手が起った。特に終曲が終ったとき、成功は決定的となった。満堂の聴衆は感激して総立ちとなり喝采を浴びせた。しかし、耳の聞こえないベートーヴェンは聴衆を背にしてボンヤリしていた。見かねたアルトの独唱者ウンガーがかれの袖をひいて聴衆の方を向けたので、かれは初めてこの曲が非常な感銘を与えたことを知り、礼をしたという。聴衆はこの劇的な悲愴な光景に感激し、さらに拍手を続けて、作曲者を五度も答礼のためにステージに出させた。答礼は三回というのが皇帝に対する礼儀なので、警官があわてて聴衆を制したという。

〔第一楽章〕アレグロ・マ・ノン・トロッポ・ウン・ポコ・マエストーソ

「第九」の規模の雄大さと、劇的な性格は、はやくもこの楽章でも示されている。導入は、天地の混沌を想わせる茫漠とした空5度（第三音がない）の響きで始まる。やがてこの響きのなかから鋭いリズム・モティーフが生起する。このモティーフが圧縮され、第1主題が澎湃（ほうはい）として湧きおこる巨大な塊のごとく聳然（しょうぜん）たる姿をあらわす。ソナタ形式は、いまだかつて、このような主題の出現を経験したことがなかったのである。

第2主題は第1主題と異って、楽しい性格のものである。これにつづく部分も、大体においてこの気分をもち、ときどき第1主題の部分をまじえながら展開部へとつづく。そしてその劇的壮大さは、再現部における第1主題への壮烈な導入において、クライマックスに達する。

ワーグナーによると「我々と地上の幸福との間をさえぎる敵意ある暴力の圧迫に対して、喜びをかち得ようと努める魂の戦い、極めて壮大な意識で把握された戦いが、この第一楽章の基礎をなしているように思える」である。

〔第二楽章〕モルトヴィヴァーチェ，スケルツォ

およそベートーヴェンの書いたスケルツォのなかで、最も大規模なものである。鋭い付点リズムを含む、むしろ単純なスケルツォ楽想が、およそ考えうる限りのすべての展開を行う。トリオの主題はあきらかに第一楽章のエピソードから受けつがれたものであり、終楽章の「歓喜の調べ」への橋わたしの役を果すことにもなるのである。

ワーグナーは「激しい喜びが、この第二楽章のはじめのリズムで直ちに我々をとらえる。新しい世界の中に我々は入り、そこで陶酔や麻酔へと駆りたてられるからである……」と言っている。

〔第三楽章〕アダージョ・モルト・エ・カンタービレ

讃歌ふうの主題旋律と希望と浄化を象徴するような明るく美しい第2主題、この両主題にもとづく自由な変奏形式をとっており、叙情的な旋律、色彩的な和声は、宗教的な敬虔さをもって瞑想的に展開され、情熱も闘争もない平和な幸福感が描き出される。

この交響曲の中での一つの頂点であり、ワーグナーは「なんと清らかに天国のようななだめ方でそれ等の音は反抗と絶望におののいた魂のはげしい促しを、やわらかい憂鬱（ゆううつ）な感覚へと溶けちせて行くことか、思い出がつとに享受したきわめて純粋な幸福への思い出が目ざめるかのように思われる…」といっている。

〔第四楽章〕プレスト終曲

第1呈示部＝まず管楽器によるあわただしい楽想が奏される。これに対し低弦がレシタティブでこたえる。それから、前の三つの楽章がそれぞれ回想され、低弦のレシタティブによって否定されていく。そしてついに、一つの歓ばしい旋律が現われる。この主題は初めに低弦によって歌われ、くり返しながら全合奏に至る。

第2呈示部＝この楽章の初めの、あわただしい楽想がもどってくる。やがてバリトン独唱が、力強く歌いはじめ、ついで合唱がそれにつづく、やがて他の独唱も加わり、ひとつのクライマックスをつくる。曲想一転して行進曲となり、テノール独唱が歌いはじめる。そして男声合唱が、力強く、力強く歌いくわわる。

再現部＝やがて曲はふたたび「歓喜の調べ」がもどり、合唱が重々しく新しい主題をうたう。やがてこの新しい主題と「歓喜の調べ」とが組合わされて、壮麗な二重フーガがくりひろげられ、全曲中の一つのクライマックスを形づくる。

コーダ＝曲想が一変する。主題旋律の新しい変奏に入り、四人の独唱者と合唱が変化のかぎりをつくして、交互に歌いすすめる。

圧倒的な合唱コーダとなり、合唱の最後は、マエストーソとなるが、管弦楽だけが残り、圧倒的な終結を一気に終る。

「県民第九の会」実行委員会

実行委員長	有馬俊一	実行委員	藤枝昭俊
実行委員	大島俊治	〃	三浦洋一
〃	沖津正巳	〃	本山　洋
〃	蔵岡　隆	〃	森　真一
〃	下田宰城	〃	森　義臣
〃	黒葛原　潔	〃	山崎崇伸
〃	林原隆治		

（50音順）

CHORUS

熊本県合唱連盟合唱団

【ソプラノ】

相澤純子
石川知子
伊藤道子
稲岡福子
入江正子
岩木恵子
岩永一恵
植村美生子
内野高子
有働玲子
馬出裕子
大塚久代
大塚充江子
緒方佳代子
緒方智子
岡村雪枝
荻　尚子
小山富美子
柿原美枝子
亀丸直美
川崎洋子
川田幸子
川本芙美子
清永晴美
古閑聡子
小尻広子
佐伯洋子
坂田智津子
佐藤恭子
鮫島隆子
塩津礼通子
篠原いずみ
杉井隆子
園田清美
園村智賀子
竹本栄子
田中みどり
鶴本礼子
富田浩子
中島智寿子
永野間千鶴子
中原優子
永松真由美
西　桂惟子
西中和子
馬場圭子
早崎山美
林田伸子
林原サチ子
日高美記
平野淑子
福岡圭子
福田史子
福田睦子
伏水浩美
藤山真由美
本田順子
前田久美子
前田弥生
松尾由美子
松田麻子
松永伊津子
松延一美
松原正子
松村元子
丸田裕子
水野恵子
宮本恵子
宮本幸子
村上直理
村田信子
矢次真季子
柳井優子
矢野保子
山野真樹
吉田佳代
吉田典代
吉田登志子

【アルト】

相川久仁子
石原恵子
磯崎ユウ子
市野亨子
牛草恵子
緒方浩子
小野敬子
小山チエ
樫木美香
樺島治美
亀川知春
亀川なおみ
清田浩子
草刈登喜代
熊野たまみ
蔵田絹子
倉富浄子
黒川温子
桑原典子
小糸芙美子
古賀　緑
国米真理子
国米山希子
坂本幸栄子
志柿昌子
静谷　紫
荘野玲子
杉本弘子
高尾百合
高瀬祐子
高田順子
竹下浩子
竹下松子
竹田綾子
田村直子
近野まり子
鶴田佐知子
土井雅代
徳永玲子
徳丸克子
中野久美子
中山節子
中山洋子
西井邦子
西村信子
長谷川まる子
林　由美子
原　千能
原口貴美子
原田千鶴子
平野みどり
福山蘭子
藤本実恵子
堀田香代子
前田直美
正木ひろ子
町原麻理
松田綾子
松原祥子
松本典子
宮良純子
三輪育子
迎　秀美
村田アキヨ
森　幸子
安田昭子
山田富美子
山本大子
弓削由美子
吉浦光子
吉田敦子
吉田浩美
渡辺明美

【テノール】

青木泰雅
出水洋一
板倉幸之輔
一山育男
井上正彦
大野昭雄
荻　昂
柏野勝広
川崎洋一
北野達也
北原　宏
小泉暁裕
古閑裕規
坂口幸男
菅嶋公尚
高宮秋雄
立川喜一
田尻英雄
田中伸明
田中浩典
千葉昌秋
長野誠二
西谷和彦
野田昌喜
間　賢一
平野照之
福田靖之
牧　宣亮
正木孝幸
松尾　眞
免田雅俊
森保一路
山田泰輔
吉原道彦
渡辺不巳夫

【バス】

愛路隆要
赤塚恒幸
足立孝士
有江俊隆
伊南俊雄
今村清治
岩下龍次
上田智徳
上村誉治
衛藤純一
江橋克巳
大津敬一朗
岡本秀一郎
岡本　均
神田一伸
草刈秀克
小塚敦郎
小南裕治
小森田　浩
近藤克也
坂本弘国
猿渡直之
椎原一彦
嶋田博紀
下田和久
谷山俊彦
田上　稔
津江親博
中内洋一
橋本新十郎
原田主税
東　正生
福村浩輔
福山愛也
藤本周一
本田正巳
松尾章弘
松尾忠憲
三賀山丈士
宮本信三
宮本大典
村上武司
山下守人

KUMAMOTO SYMPHONY ORCHESTRA

熊本交響楽団

【コンサートマスター】

広瀬大喜

【第1バイオリン】

木村宣子
小山雅子
清永健介
桑原敦子
国米真基子
重石政和
柴谷　淳
白川妙子
田野育美
長坂浩子
永松　孝
蓮田麗八郎
広瀬大喜
前田くみ子
森川敬之
山崎崇伸
山本登志子
吉永誠吾

【第2バイオリン】

秋山敦子
池辺敏一
上田忠幸
大塚　操
岡　純子
岡田浩孝
汐月哲夫
田上晴男
中野真由美
野田和子
野中紀代子
萩原由美
東　真知子
平井隆博
藤本佳澄
松崎浩二
宮本吉辰
三輪直美
本山　洋
米　京子
吉津丈夫

【ビオラ】

牛島啓子
緒方けい
緒方　肇
草場立太郎
工藤美保
国友由紀子
志垣裕子
高橋久美子
平田啓子
丸野真司
森田茂武
吉岡英子
吉田美智子

【チェロ】

安達信一
石垣博志
内田園子
片山玲子
古泉優子
士野　優
高浜秀光
竹岡倫示
本田義信
福永憲包
長尾和治
長坂輝喜
三浦純子
水原真純
矢野道彦
山中朗史

【コントラバス】

井上　潔
尾崎　恵
古泉俊彦
国米　稔
坂田拓司
竹内尚志
山本英津子

【フルート】

緒方宏明
木村邦子
佐藤英一
柴田芳江
渡辺勝利

【オーボエ】

片岡久哉
辰野裕昭
中村美春
宮本千草

【クラリネット】

黒木健次
溜渕孝二
原　敏郎
原田晃一

【ファゴット】

小田穂積
黒田孔太郎
武田竹虎
田畑博美

【ホルン】

田畑博行
黒葛原　潔
山口亮二
吉村善孝

【トランペット】

市原　彰
中野真一郎
堀江幸司

【トロンボーン】

田北洋康
辻田清次
早川真二
古澤浩幸

【チューバ】

東　正生

【ティンパニ】

大仁田弘喜

【パーカッション】

石見佳子
金坂義徳
中野雅夫

ベートーヴェン 第九

指揮：大友　直人

ソプラノ　高見　久美子
アルト　岡　ますみ
テノール　大野　光彦
バリトン　柴田　啓介

合　唱：熊本県合唱連盟合唱団

管弦楽：熊本交響楽団

昭和58年12月11日(日)　午後6時開場　午後6時30分開演

熊本県立劇場コンサートホール

入場料

S.（指定席　1階）　2,500円
A.（自由席　1・2階）　2,000円
B.（自由席　3階）　1,500円

主催：熊本県・県民第九の会・熊本県文化協会

入場券発売所　熊本県立劇場・KNサービス・交通センタープレイガイド

お問い合わせ先　熊本県立劇場事業課 ☎0963－63－2233　県民第九の会事務局 ☎0963－56－7113

熊本県立劇場自主文化事業のお知らせ

（昭和58年12月～昭和59年３月）

クィーンズランドユースと熊本ユースの共演

クィーンズランドユースオーケストラ演奏会

12月4日(日) 2：00PM開演

チャイコフスキー作曲 序曲 1812年 他

大　人　1,500円
高校生以下　1,000円

初来日、中国歌劇団、女だけのミュージカル！

中国越劇「紅樓夢」

12月8日(木) 6：00PM開演

A（指定席）4,000円
B（自由席）3,000円（当日500円増）

県民参加、歓喜の大合唱！

ベートーヴェン第九

12月11日(日) 6：30PM開演

指定券 2,500円　A席 2,000円　B席 1,500円
指揮／大友直人
演奏／熊本交響楽団
合唱／熊本県合唱連盟合唱団
県民第九の会・県文化協会

寄席

2月4日(土)

出演
- 三遊亭　円　楽
- 桂　歌　丸

熊本県能楽協会による公演

熊本能

2月11日(土)

「国栖」「経正」他

ヴァイオリン江藤俊哉を囲むファミリーコンサート

江藤俊哉リサイタル

3月10日(土)

ルクレア作曲「2つのヴァイオリンのための」ソナタ イ長調 他
江藤俊哉（ヴァイオリン）
江藤アンジェラ（ヴァイオリン）
江藤玲子（ピアノ）